

第12回交流会 越後米沢街道・十三峠大会

享和絵図より
(米沢市上杉博物館蔵)

とうほく街道会議

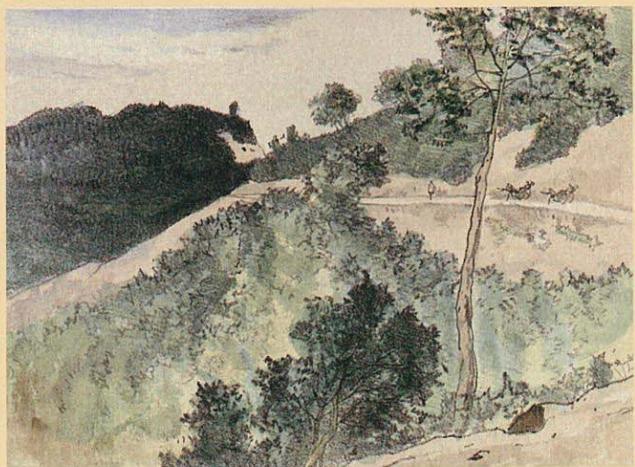
十三峠から置賜・岩船の明日を考える
~地域がめざすアルカディア~

報告書

平成 28 年

11月4日(金)～5日(土)
<会場> 川西町フレンドリープラザ ほか

山形県東置賜郡川西町大字上小松 1037-1



高橋由一画「三島県令道路改修記念画帖
其ノ三山形県之巻」より
西置賜郡小国新道ノ内手ノ子村字
宇津峠ヨリ宇津峠切り割リヲ東ニ望ム圖
(山形大学付属博物館蔵)

主催 / とうほく街道会議第 12 回交流会 越後米沢街道・十三峠大会実行委員会

越後米沢街道・十三峠交流会（NPO 法人ここ掘れ和ん話ん探検隊、手ノ子地区協議会、黒沢峠敷石道保存会、玉川地域振興協議会、諏訪峠古道保存会、全国森林インストラクター会、小国町観光協会、飯豊少年自然の家、関川村自然環境管理公社、小国町、飯豊町、川西町、関川村（新潟県）、山形県置賜総合支庁、山形河川国道事務所）と とうほく街道会議

後援 / あおもりかいどう会議、みやぎ街道交流会、ふくしまけん街道交流会、出羽の古道六十里越街道会議、羽州街道交流会、

NPO 法人東北みち会議、羽越河川国道事務所、株式会社山形テレビ、株式会社レビュー山形、株式会社さくらんぼテレビ、河北新報社、読売新聞山形支局、朝日新聞山形総局、毎日新聞山形支局、産経新聞社山形支局、株式会社米澤新聞社、山形新聞・山形放送

広告協力 / 川西町浴浴センターまどか、関川村観光協会、樋口建設株式会社、荒川興業株式会社、ワーズテック株式会社小国事業所、めざみの里観光物産館、株式会社殖産工務所、飯豊町観光協会、株式会社高橋工務店、安部工業株式会社、山形三菱鉛筆精工株式会社、森のめぐみ直売所、樽平酒造株式会社

11月4日(金)

●交流会 第一部 「フォーラム」 13:00～17:00

【オープニングセレモニー】13:00～14:00 会場：川西町フレンドリープラザ

- ・オープニング 越後瞽女唄 萱森 直子 氏（越後瞽女唄伝承者）
- ・主催者挨拶 越後米沢街道・十三峠大会実行委員会長 高橋 純 / とうほく街道会議 会長代行 梅津 輝雄
- ・開催地挨拶 川西町長 原田 俊二 氏
- ・来賓挨拶 飯豊町長 後藤 幸平氏 / 小国町長 仁科 洋一 氏

【基調鼎談】14:00～15:20 会場：川西町フレンドリープラザ

「イザベラ・バードも見た十三峠・山形の魅力を語る」

- <対談者> あべ 美佳 氏 (作家、脚本家)
 佐藤 洋詩恵 氏 (やまがた女将会前会長、日本の宿古窯副社長)
 渋谷 光夫 氏 (アルカディア街道IB倶楽部会長)

【分科会】15:40～17:00

●第1分科会 / 会場：川西町フレンドリープラザ

パネルディスカッション

「十三峠の歴史から山形南部・新潟交流の明日を探る」

- コーディネーター / 宮原 博通 氏 (地域環境デザイン研究所所長)
- パネラー / 原淳一郎 氏 (山形県立米沢女子短期大学准教授)
 横山 昭男 氏 (山形大学名誉教授)
 廣瀬 健二郎 氏 (国土交通省山形河川国道事務所所長)

●第2分科会 / 会場：川西町生きがい交流館

パネルディスカッション「歴史の道・十三峠の保全と活用」

- コーディネーター / 鎧 啓記 氏 (NPO法人東北みち会議理事長)
- パネラー / 米野 紀男 氏 (米沢街道地域づくり検討会会長 / 新潟県関川村)
 岡村 俊春 氏 (黒沢峠敷石道保存会事務局長 / 山形県小国町)
 高橋 純 氏 (手ノ子地区協議会宇津峠部会会長 / 山形県飯豊町)
 片倉 尚 氏 (諏訪峠古道保存会会長 / 山形県川西町)

●交流会 第二部 「街道談義」 18:00～20:00 会場：川西町浴浴センターまどか

●活動紹介パネル展 12:00～17:00 会場：川西町フレンドリープラザ ギャラリー

11月5日(土) 街道探訪会

A：越後豪農と鷹巣峠探訪コース (関川村) 徒歩距離約 2 km

B：黒沢峠・苔むした敷石道探訪コース (小国町) 徒歩距離約 3 km

C：光あふれる宇津峠と人々との機微に満ちた手ノ子宿コース (飯豊町) 徒歩距離約 5 km

D：諏訪峠から望むアルカディア置賜盆地と

高梨健吉・井上ひさしのふるさと小松探訪コース (川西町) 徒歩距離約 6 km



本日は、各地より大勢の方々にご参加頂きありがとうございます。私たち現地スタッフもこの大会の開催が出来ることを大変に光栄なことと喜んでいます。また、川西町は「日本奥地紀行」翻訳者の一人である高梨健吉先生の故郷であり、更には吉里吉里人の井上ひさしさんの出身地でもあります。この様な点からも、大会の成功に向けて精一杯頑張りたいと思います。

越後米沢街道は、米沢市から新潟県黒川（現胎内市）までをいいますが、川西町の諏訪峠から新潟県関川村の鷹巣峠までに13の峠があることから十三峠街道といわれ、近世までは峠渡の山岳道でした。この街道沿線の4町村でつられた「越後米沢街道十三峠交流会」は、峠や古道を愛する民間団体で、前身の「十三峠活用連絡会議」が発足してから今年で12年となります。

今大会サブテーマの「地域が目ざすアルカディア」については、かの偉大なイギリスの女流旅行家「イザベラ・バード」が発した“アジアのアルカディア”が基になっております。明治11年、文明先進国から日本を訪ね、しかも蝦夷（えぞ）の原住民・アイヌ民族を知りたいと旅のテーマにした事は、多くの出版物等によって知られています。

特に、私が興味あるのは新潟からのコースです。あえて苦労を承知の上で十三峠を歩き、内陸を北上します。新潟から直接函館行きの航路があるにもかかわらず、あえてそれを避けるかのように船をやり過ごし、直後即断で陸路に決めていること。その辺の心の底にあるものが、今日、話題にされればと期待しております。

今年1月に「宇津峠」が山形県の「未来に伝える山形の宝」に登録され、更に、10月は「黒沢峠の敷石道」が「地域づくりのやまがた景観賞」で知事賞に選定されました。この様に13峠のうち2つの峠が新聞紙上に花開かせました。そんな嬉しいさなかでのうほく街道会議の開催に誇りさえ持つことができます。

最後になりますが、この大会を開催するにあたり、関係の皆様や各企業・行政等の各方面からの多大なご助力・ご支援を頂きましたことに心からお礼申し上げます。

とうほく街道会議会長挨拶（要旨）

会長代行 梅津 輝雄

今、先人が築き上げてきた歴史街道は、見直しがされて来ています。歴史街道こそが、今我々が最も注視すべきで、街道を往来した人・もの、色々な歴史の関わりを大事にそれを繋いでいくことが、求められていると思っています。

この街道は、現在の国道113号で日本海・太平洋を結ぶ大変重要な路線ですが、東日本大震災当時多くの関係者が、また原発事故発生に伴い大きなトレーラ・貨物車が入ってきました。この国道が歴史街道も含め、国からも大きな注目を集めています。

震災復興と同時に、歴史という先祖が引き継いでくれたこの街道を広く皆さんと共有しながら、元気を出して、もっともっと地域が活力を持つ状況にしなければならないと思っているところです。

これからも基調鼎談、分科会、明日の探訪会を楽しんで、街道の輪を共有し、広めて、元気に繋げて頂きますようお願い申し上げます。



開催地挨拶（要旨）

川西町長 原田 俊二 氏

本日、とうほく街道会議を川西町で開催出来ることを本当に嬉しく思っており、心から歓迎申し上げます。とうほく街道会議が、各地の歴史ある街道を掘り起こし、情報発信し、12回目を数えるということで、これまで携わつて来た皆様に心から敬意を申し上げたいと思います。

今年は、米坂線が、米沢から今泉まで大正15年に開通して90年、今泉から新潟まで繋がり80年という節目を迎えたところです。その歴史をひもとくと、幹線の奥羽本線が通ったものの、支線は動きがない中で、置賜や米沢の人達は、越後街道は当然あったが、経済的な発展をするためには新潟との交流が必要だと署名活動をして、大正時代に整備が始まりました。線路工事には盛り土が必要ですが、周辺にあるお墓以外の高い土があるところから全部持ち寄って造ったと歴史書に書かれてあり、地域の方々の熱意と新潟と置賜の結び付きの強さを感じています。

今、地方創生ということで、各自治体が強みを活かした地域発展をめざし、人口減少を克服することが必要です。一方で、各自治体の持っている良さを結びつけながら新たな価値を創造することも大切であり、連携によって、置賜全体の発展をめざしていかなければならないと思っています。そのテーマとして、140年前にイザベラ・バードが通った道をもう一度掘り起こしていくことに大切さを感じています。

黒沢峠の石畳を造った先人の努力も素晴らしい訳ですが、あの石畳を掘り起こし、整備をしたエネルギーは更に素晴らしいと私は思っており、そういった一つ一つの積み重ねが本日の大会に結びついたと確信しております。

是非、地方創生を図る起点となる有意義な大会となることを祈念しています。



来賓挨拶（要旨）

飯豊町長 後藤 幸平氏

イザベラ・バードが「日本奥地紀行」で、置賜を語った言葉が素晴らしいもので、圧倒的な迫力を感じます。特に、飯豊町手ノ子では、真心のこもった対応への本当に素朴なバードの感動が綴られております。一方、松原では、今は失われた“流れ灌頂”が明確にイラストまで描かれてあります。

バードが綴った沢山のロマン、謎を、しっかりと勉強して、是非語り継いでいきたいと思います。

とりわけ、この置賜の散居集落の風景は、アジアのアルカディア、鉛筆で耕した様な美しい風景であると書いています。それは、変わってはいけない様に思います。

この置賜の風景を是非私たちが後世に引き継ぐために、今何をしなければいけないか、しっかりと勉強していきたいと思います。

来賓挨拶（要旨）

小国町長 仁科 洋一氏

先日、関川村との合同イベントで大里峠を歩き、その後黒沢峠のイベントもあり敷石道を歩きました。両日とも好天に恵まれ、素晴らしい景色、それから昔の人がここを造り、通ったのだという思いを十分に胸に感じながら歩くことが出来ました。

黒沢峠は、地元の黒沢の人達が、本当にコツコツと敷石を堀上げ、保存してきた。それで先日の「地域づくりのやまがた景観賞・最高賞」受賞という、素晴らしい活動をしてくれています。

小国町には、13の峠のうち、10の峠があります。なかなか全部を歩きるのは大変ですが、1つ1つ制覇する様な企画もするグループもございます。

そんな十三峠を大事に守っていきたいと思っているところです。

●基調鼎談

「イザベラ・バードも見た十三峠・山形の魅力を語る」

イザベラ・バードの『日本奥地紀行』の十三峠部分には、ここで書ききれなかった魅力ある地域の温かさが沢山あります。バードの足跡をふり返りながら、十三峠や山形を見つめ直して、それらの魅力を探ります。

<対談者>



あべ 美佳 氏
作家、脚本家



佐藤 洋詩恵 氏
やまがた女将会前会長
日本の宿古窯副社長



渋谷 光夫 氏
アルカディア街道
IB 俱楽部会長

それぞれのバード

○あべ美佳氏 こんにちは。尾花沢出身で脚本家のあべ美佳です。今日のお二人は、イザベラ・バードのスペシャリストです。私は質問させていただく市民代表として、バードという女性がいかに魅力的な人材であるか、バードが歩いた我がふるさとの魅力をいかに発信していくかを、お役目として預かっているような気がします。

早速、自己紹介を兼ねて、バードへの思いをお願いします。

○渋谷光夫氏 アルカディア街道IB俱楽部の渋谷です。IBとは、イザベラ・バードの略称です。バードの足跡を辿り、山形の良さを発信している俱楽部です。私がバードにはまったのは、8年前の定年退職の時、バードの足跡を辿るツアーに参加してからです。

その後、県内を幾度となく散策し、各地で文化遺産の管理や町おこしに頑張っている沢山の人にお会いしました。そして、一気呵成で本まで出していました。今は、バードの足跡を辿る散策マップを作成したり、山形の魅力を再発見する活動をしております。また最近は、バードと関わりのある黒石、日光で学び、バードが更に身近になりました。

今日は、高梨健吉先生生誕の小松で、バードとアルカディア街道の魅力を語り合えればと思います。また、町おこし、地域間の交流が更に広がるため、知恵を出し合って行きましょう。

○佐藤洋詩恵氏 上山温泉の古窯の女将です。山口県生まれの広島育ちです。イザベラ・バードに関しましては、約30年前にお客様から上山のところを書いた原文コピーをいただきました。そこには「この地が外国人の遊歩区域内であれば、保養地になるだろう」とありました。リゾートは、温泉ということで、私の中でぴたりと当てはまりました。

イザベラ・バードとは

○あべ 渋谷先生、バードの基本の「き」を教えてください。

○渋谷 バードは、1831年生まれ、大英帝国ビクトリア朝の探検作家です。当時世界を駆けめぐり、ビクトリアン・レディ・トラベラーと呼ばれた最も高名な人です。バードはカナダ、アメリカ、ニュージーランド、ハワイ、そして日本、更には朝鮮、中国、マレーシア、チベット、ペルシャ、インドなどを旅しています。【写真1】が、バードの顔です。

○あべ あらあ、女将さんに。

○渋谷 そう女将さんとそっくりです。また、中国などでの写真を見ると、身長は約150cm位で小柄です。

日本には、1878年（明治11年）5月から12月まで初めて訪れました。当時の日本では、外国人が自由に動けるのは居住地の半径約40kmに制限されていましたが、バードは政府から無制限の旅券を入手し、旅が出来たのです。

バードがその2年後に出版した『日本奥地紀行』では、置賜地方を“東洋のアルカディア”と絶賛しています。この『UNBEATEN TRACKS IN JAPAN』の最初の邦訳は、1973年高梨先生で



【図1】蓑笠姿のバード



FUNBEATEN TRACKS IN JAPANの邦訳本



【図2】多様なバード本

した。2巻あった初版本を訳したのではなく、普及用の省略本の訳本です。原著は3冊、訳者は7人おります【図2】。

その後、2008年の時岡敬子さん、2012年の金坂清則先生の完訳本が出たことによって、新しいことが沢山分かり、バードの評価が高まりました。また、関係する数多くの解説書や雑誌、メディアの特集などが出ています。

バードの魅力

○あべ バードの旅した奥地紀行ルートを教えてください。

○渋谷 バードの足跡ですが、横浜に上陸し北海道のアイヌ村・平取が最終目的地です【図3】。東京から、日光、大内宿、新潟へ。ここから船で北海道へ行く予定でした。会津若松や米沢など戊辰戦争での賊軍地は通りませんでした。

でも、船が出発したので、山形に向かうことになります。一週間も新潟にいて、あれほど几帳面な人が、船に乗り遅れることはないと思います。また、なぜ最短距離の鶴岡・酒田ではなく、置賜、山

形に来たのか不思議です。持参したプラントンの地図では、置賜地方は空白であり、過酷な旅を求めるバードの探検心を呼び起こしたのではと思います。

しかし、置賜、山形を通ったお陰で、私達はこうして、出会いを楽しんでいる訳で感謝しなければならないと思います。

○あべ すごく面白い素材で、これはネタになると思いました。私がバードを物語にするとしたら、伊藤青年を主人公にバードという美しいけど怖そうな女性と旅をする視点とか、スパイセンスな切り口を考えますが、高橋克彦の『ジャーニー・ボーイ』などがあると女将さんが教えてくださいました。女将さんは、このバードになぜそんなに惹かれているのですか。

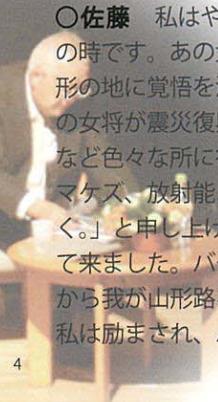
○佐藤 私はやっと山形に馴染んだと思ったのが、実は震災の時です。あの大変不幸なことが起きた時、この東北、この山形の地に覺悟を決めて生きると心から思ったのです。東北6県の女将が震災復興要望のために国土交通大臣や、JTB、マスコミなど色々な所に行きました。私は「アメニモマケズ、カゼニモマケズ、放射能ニモメゲズに頑張っていますので復興をよろしく。」と申し上げました。その後、私なりに復興のために努力してきました。バードは、いろんな使命があったとはいえ、横浜から我が山形路を経て、北海道まで行ったという、この勇気に私は励まされ、バードが私の支えだったのです。



バードの「奥地紀行」行程

* 北海道からの帰京後
京都・伊勢の旅へ

【図3】『日本奥地紀行』のルート





私は、おまじないとして、バードが書いた上山の美しい娘【図4】の絵を神棚に飾ってあります。毎日これを見ては、頑張ろうと励まされています。私のミューズ(女神)です。

○あべ 今では、あちこちでバードの名前が出る様になりましたが、女将さんは30数年前からすごいご縁ですね。

○佐藤 高梨先生は、遠来の客人それも妙齢なご婦人を世に知らしめた。愛郷心ですね。

○渋谷 この上山の娘さんは、女

将さんに似てると多くの方が言っていますよ。

○あべ 似てる、似てる。

○渋谷 似ていますね。私は、山形で男声コーラスをやっていますが、そのメンバーの一人が、「この顔、うちのひいばあちゃん」とそっくりだと言ったのです。実はその人は、バードが上山で泊まった会津屋の子孫です。

○佐藤 えーと 今、鳥肌立っています。

○あべ 渋谷先生がなぜバードにはまつたのか。そのあたりも含めて教えていただけますか。

○渋谷 私は教師のなりたての23歳の時に、高梨先生の初版本を読み、バードの観察力の鋭さ、そして表現力の豊かさだと思います。バードは、完全に民間人の一女性の目で見ている。中には不潔だと書いていますが、プライバシーもない中で、日本人の良さとかを沢山書いています。

旅の成功要因は6つ考えられます。1つは、大英帝国の巨大な力と明治政府の連携、警察の保護監督を受けたことです。

2つ目は、旧街道に整備された内国通運会社と郵便・電信の活用で、宿屋と荷物の引き継ぎがきちんとされたこと。

3つ目は、装備と食料、随行者は最小限だったことです。当時の外国人の旅は、荷物や食料品を沢山持参するのが普通でした。

○あべ 最小限といつてもベッドやゴム製浴槽がありますね。

○渋谷 ベッドは軽い簡易ベッドです。荷物は、最初50kgでしたが、新潟から約30kgに少なくしています。

鬼怒川温泉のこととは書いません。温泉に入ったのは上山だけです。そこは蔵座敷で、プライバシーもやっと保たれて、内風呂に入っています。

装備を最小限、随行も伊藤一人、食事は現地調達です。

ところで、バードの嫌いな食べ物って何だと思いますか。

○あべ 外国人ですから納豆。

○佐藤 たくあん。私スチュワーデスしていた時、一番難儀したのが、ぷーんと匂うたくあんでした。

○渋谷 そうですね。たくあん、納豆、あと味噌汁です。蕎麦はみみずの様だということです。それに対して、手ノ子で黒豆を食べて、非常に美味しかったと書いています。

それから、手ノ子で「伊藤がぞつとするものを7皿食べた」と書いています。私は納豆餅だと思っていましたが、手ノ子の方が「当時、納豆は冬しか食べられなかった」と言いました。ところ飯やところてんなのか、これはまだ謎です。同じく手ノ子で、バードを団扇で1時間扇いでくれて、料金などいらないと言います。これも日本人の素晴らしいしさだと書いていますが、手ノ子の高橋さんは、これは「蠅ぽい」じゃないかと言っています。

○あべ なるほど! 蠅ぽいね。昔はすぐに蠅が寄ってきたでしょうからね。

○渋谷 続いて成功の4つ目、事前に探訪予定地の情報を収集し、現地での的確な判断と対応です。しかし、通訳の伊藤が山形や各

地の方言を理解できたのかが不思議です。

5つ目、現地の生活習慣や人権を尊重し、自己主張を抑えた友愛精神です。不潔とか、貧しさのことなど書いてますが、悪口的なことはないです。障子に穴を空けるなどして覗かれるけれど、叱っていません。小松の出発時は1,500人集まつたというのですが、優しく接した様です。

6つ目、当初伊藤のことを「する賢く、お金に汚い男だ」と書いていますが、徐々に伊藤を信頼していきます。伊藤のバードへの忠誠心と、周囲への配慮が旅を成功させたのではないかと思います。そこも魅力です。

○あべ 本当に面白いことが沢山ですね。私の主人が奥地紀行を読んでいて、「日本の男性をバカにしている」と言ったのですが、そういうところもあるけど、良く読めば分かるのです。

○渋谷 がに股とか、背が低いとかも言ってますね。

○あべ それを聞いて、これはドラマになると思いました。なぜなら、物語というのは変化です。面白さのポイントは、いかに起伏のあるストーリーが作れるかです。

バードも奇異の目でみられ、叩かれれば叩かれるほど、最後が効いてきます。ドラマチックで面白いなと思います。

観光の原点

○あべ 私は、色々な地方に行きますが、どこに行っても同じような店があり、あまり東京と変わらないと思っています。友人のフランス人の映画監督に「山形にフランスからお客様が来てもらえる様にするには?」と問うと、彼は「フランス行ったらどこに行く?パリ、エッフェル塔を見に行くでしょう。外国人も同じで東京、京都に行きますよ」と言われました。

そんな時、ここにしかないものを大事にする、山形の方々の街道や峠の保存活動を知りました。私たちは、昔から残っている街並みや原風景を探して旅します。日本人でさえもそんな所を旅行するのです。女将さんいかがですか?

○佐藤 黒沢峠の景観賞の新聞記事を読みながらバンザイと叫んでしまいました。私も日本の原風景が我が山形県にも沢山あると思っています。ライシャワー博士の「山の彼方のもうひとつ日本」は、山形のある東北ではないかと思います。

また、JR北海道車内誌の今年5月特集がなんと、バードでした。バードをインバウンド(訪日外国人旅行)の先駆けと書いていました。

地方の時代は、住む人が生き生きして、その地域に誇りを持ち、受け継いできたものを磨いて、それを発信する。まさに次代の要求する観光ではないかと思います。

アルカディア街道の魅力

○あべ アルカディア街道という素敵な名前があります。バードにとって、アルカディアはどこなのですか?

○渋谷 バードが桃源郷と絶賛したのは、米沢盆地の独特的の景観とこれまでの米沢藩の生活ぶりです。バードがなぜアルカディアと絶賛したのか、次のことが考えられます。

先ず、「連日の雨と厳しい峠越えで、疲労困憊していましたが、宇津峠で晴天になり、山頂から米沢盆地を眺めて、気分が爽快になった」。やっぱり旅は天候が左右しますね。

2つ目は、「手ノ子や小松での温かいおもてなしに、優しさや人柄のよさに安堵した」。

3つ目は、「肥沃な土地、多様な農産物が整然と栽培され、勤勉な人達であった」などだと思います。

バードの旅の天気は、新潟から市野々まで連日雨だったのですが、宇津峠の頂上で丁度晴れた。その後、金山までが晴れで、金山から秋田は雨々です。山形は、梅雨の合間の天気に恵まれて、

バードもさぞ気分が良かったのでしょうか。

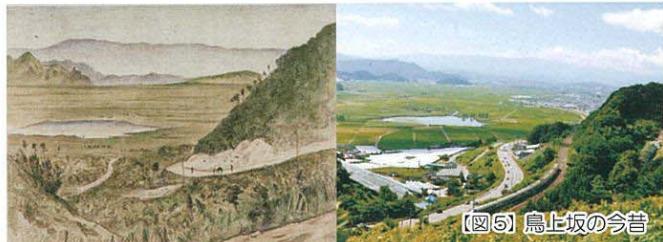
なお、バードは上山の宿で“東洋のアルカディア”と記しました。米沢盆地だけではなく、温泉地の上山も含んだ一円をアルカディアとも言えると思います。

○あべ アルカディア街道について、お願ひします。

○渋谷 アルカディア街道は、バードが通った道を指し、越後米沢街道、小松からの糠野目街道、夏茂から米沢最上街道、上山からの羽州街道です。

バードの日記、高橋由一の街道や歴史建造物の画や歴史文化資産などで追っていくと繋がってしまいます。

この街道の魅力を少し紹介します。十三峠は、明日探訪する鷹巣峠、黒沢峠、宇津峠、諏訪峠などがあり、当時の面影が色濃く残っています。地元の方々が復元・保存や探訪会などの活動をしています。そして、三島新道の鳥上坂、高橋由一画に白竜湖と米沢盆地も描かれています。鳥上坂の今昔の対比【図5】もアルカディア街道の魅力ではないかと思います。



【図5】鳥上坂の今昔

そして、赤湯から上山までは、バードも渡った堅磐（かきわ）橋【図6】など、石のアーチ橋が4橋現存しています。

○あべ 堅磐橋の眼鏡橋、『いしゃ先生』で口ヶしました。

○渋谷 山形のまちについて、県庁を中心として素晴らしい街並みだとバードがほめています。他にも、南陽のハイジアパークには、バード記念コーナー【図7】があり、全国から人が来ます。

○あべ 素晴らしい。

○渋谷 金山に街道と食を結びつけようとして、バード御膳がありますが、メインは鶏肉です。

○あべ ずんだ餅、だんごではなく、鶏。バードだから。

○渋谷 金山で伊藤が鶏を手に入れて食べました。日光以来のことです。そんなことで、バード御膳というものを作ったのです。猿羽根峠では、黒豆とバードコーヒーもあります。バードに親しむ人がやっています。



【図6】バードも渡った堅磐橋



【図7】ハイジアパーク南陽のバード記念コーナー

今後の取り組み

○あべ 『いしゃ先生』の映画を制作した時に「おらだの金で作るので、おらだの所だけで撮影してくれ」とお願いされました。でも、一本のドラマや映画制作には、色々な所の映像を入れたほうが、最後は自分たちの成果になります。

その結果、計算上は山形県民52人に1人という沢山のお客様が見てくださった。これは西川町以外の方々をたくさん巻き込んだからです。あえて多くの人と手を組んだほうが良いことの

現れだと思います。

さて、このバードですが、それこそ山形県以外の方、北海道までの沢山の方と手を組んで何かを成し遂げるプロジェクトは出来ませんか、女将さん。すごい町おこしになませんか。

○佐藤 私やはり、震災がエポックメイキングだと思います。あの時、東北は切り捨てられるのではないかと本当に思いました。息子に言ってきたのはたった一つ、郷土愛。あなたの住まわして貰っているこの場を大事にして、地域の役に立つような宿を作りなさい。と私も頑張って来たつもりです。私の作りたいのは、皆様が必要とする宿。そんな宿になれたら、それこそ本当の地域おこしだと思って頑張って来ました。

バードについても、これからも頑張って参りましょう。

○あべ 渋谷先生は、アルカディア街道を点から線に繋げたいて言っていましたが。どんな思いがあるのでしょうか？

○渋谷 十三峠交流会は、関川から小松まで線に繋がっています。これを金山まで線にし、そして面に繋げて行きたい。

出来れば、あべさんがおっしゃるように、全国各地の方々と手を取り合って、足跡を愉しめば、バードの魅力は倍加してしまうことでしょう。

2年後は、バードの来日140年の節目です。私は山形で全国的な交流会を開催したらどうかと思っています。

○あべ 2年後が節目ですね。そんな時に、映像化が決まつたら良いですね。例えば、関わりのあるNHK各局が各地域のイザベラ・バードの物語を連続ドラマでリレー出来ないかと思っています。それだったら5年かかると思います。

○渋谷 良いですね。山形にも飯豊町女声合唱のアルカディア賛歌、イザベラ・バードの山形紀行という歌謡曲を作つて歌つている方、金山にも金山の良さをCDに作った方もいます。

また、バードの足跡についての新しい見方・考え方と発見が次々と出ています。一人一人が、この街道を創っていく、山形の良さを全国に発信していくということじゃないでしょうか。

まとめ

○あべ 最後のまとめとして、思うところをお願いします。

○佐藤 私も不惑の歳を迎えましたので、惑わずこの道を進んでいきたいと思います。私は山形が大好きです。これからもやまがた女将会も含め働く女性として、郷土に誇りをもちながら、次の世代に繋いでいくことを心掛けたいと思います。

最後に、イザベラ・バード様に、ようこそ山形にお越しくださいて、センキューベリーマッチでございます。

○渋谷 私たちは、この山形の良さを見過ごしているのではないかと思います。バードは山形の良いところも沢山見ているわけですね。幸いにも山形には「日本の原風景」と言われる所が沢山残っています。それを家族や仲間と一緒に、新しい発見を沢山していただきたいと思います。IB俱楽部では、山形だけでなく、東京で研修会など開催し、更に良いところを広めていきたいなと思っています。

今日もこれから第1・第2分科会で、それぞれの人びとの関わりなど、沢山の貴重な話が聞けると思います。今日の大会を、契機として次のステップに進みたいものです。

○あべ 長い時間ありがとうございます。2年後は、バード来日140年です。その時に、なにか皆さんと一緒に大きな仕掛けが出来たらと思います。今日のご縁に、感謝いたします。

ありがとうございました。

※図の写真は、プレゼンテーション画像から抜粋

●第1分科会 「十三峠の歴史から山形南部・新潟交流の明日を探る」

近世の越後米沢街道・十三峠や明治以降における道路開拓が果たしてきた役割を歴史的（縦軸の流れ）・空間的視点（横軸／面的広がり）から探り、新たな山形南部・新潟間交流の明日の展開を話し合って頂きました。

＜パネルディスカッション＞

【コーディネーター】 宮原博通氏



地域環境
デザイン研究所
所長

【パネラー】 原淳一郎氏



山形県立
米沢女子短期大学
准教授



横山昭男氏
山形大学
名誉教授



廣瀬健二郎氏
国土交通省
山形河川
国道事務所所長

○宮原博通氏 十三峠は、約500年前の戦国時代に、大里峠を伊達14代稙宗が拓いたのが始まりとされます。その後、この峠を色々な人、モノや文化が通りながら地域の経済的な活動を支えて来ました。先ずは、この様な十三峠の歴史的事実をきちんと捉えることが大事ですから、各パネリストに歴史的事実を説明頂きます。

近世の十三峠の歴史について

パネリスト 原 淳一郎氏

3点に絞って話をさせて頂きます。

1. 江戸時代に流通したモノは何か

- 1) 越後茶：米沢藩では、関東などもあるが、越後のおそらく村上のものと思われるが、ほぼ移入に頼っていました。
- 2) イサバ物：越後街道だけでないが、塩蔵・乾物にして運びます。冬は生魚もありました。

3) 鉄製品：手ノ子の横山さんの資料では、出雲から鉄を移入し、小国で鉄製品に変えて、置賜まで運んでいたと書かれています。
4) 青苧：最も大事です。江戸時代、小千谷縮の原料の多くは、下長井郷、北条郷に頼っており、多くの商人が越後から来ていました。越後小千谷の青苧問屋田中家の例では、5月に来て、前年の青苧で織った縮を売り、青苧仕入れの約束をして帰り、再び7月に来て買って帰る。この様な事が毎年行われていました。いかに越後が青苧を必要としたかに、横山昭男先生の青苧専売騒動という論文があります。米沢藩が青苧を一括買上げようとしていますが、反対運動が起こります。その中核が越後の商人です。
5) 幕末の道路改良・敷石道：宇津峠にある弘化2年(1845)の道普請供養塔の井上先生の研究によると、十三峠の敷石道を作るに際の人足数とともに、商人の名前が書いてあり、米沢の大商人や下長井郷、北条郷の青苧商人・問屋の名前が沢山刻まれているそうです。

6) 小国の米：関川から舟運ということで、米沢まで持ってくるという流れはありませんでした。

7) 小国や飯豊町周辺の木材：江戸藩邸用や幕府の普請命令の木材は、飯豊や小国から切り出しますが、かなりの陸路で大変ですから、塩川まで出して、阿賀野川を下らせると会津藩と掛け合ったりします。

2. どういう人が移動したか

瞽女さんや六十六部（宗教者）とか、たくさん通っています。

- 1) 役屋・番所：見落としてならないのが、小国役屋（やくや）です。米沢藩では、寛文4年（1664）に半分領地を減らした後も、5支城の1つが小国になりました。また、小国（玉川）に重要な番所があり、2人の役人が配置されていました。また宝暦3年（1753）から寛政（1789-1809）まで、幕府領の岩船郡91村が

米沢藩預地になりました。

2) 経済的関係：下関村の渡邊家や与板（現長岡市）の三輪家などから多くの借財で、鷹山の藩政改革が成り立っており、米沢領民は“渡邊家に足を向けて寝れない”という程です。

3) 宗教的行動：小国の大宮子易（こやす）神社に、安産祈願する事例がかなりあります。また、米沢から伊勢参りの場合、帰りは新潟から十三峠を通って来ます【図1】。

【図1】伊勢参りの図



<文政3年置賜郡東藤泉村民>

関川村から置賜までは、通常2泊3日、市野々、手ノ子か小松泊が一般的です。雪道だと渡邊家資料で、米沢へ4泊5日、帰りが3泊4日です。この様な道中日記を集めるところが分かると考えています。

3. 交通史視点から見た越後街道

参勤交代などに使用されないため本陣や脇本陣はないが重要な街道でした。街道の平均伝馬数をみると、会津街道（5.7疋）や下長井街道（11.25疋）で、越後街道は24.9疋と圧倒的に多いです。最上川や阿武隈川の舟運は、米沢にとっても重要ですが、大量なものや重いものは運べないが、途切れることがない。また、預地や海に出られる唯一の道であったと思います。

越後街道の歴史と文化～江戸期から近代へ～

パネリスト 横山昭男氏

明治に入って、制度などにどの様な変化があったかについて、簡単に話します。

- 1) 山形県：明治9年に山形県（村山郡・最上郡）、置賜県、酒田県（明治7年からは鶴岡県）が1つになります。その統一山形県の初代県令は、鶴岡県令であった三島通庸です。三島は薩摩出身で、山形、福島、栃木の県令を経て、警視総監になりました。
- 2) 明治時代の交通上の変化：江戸時代は幕府で統一のものもあるが、三百諸侯それぞれが街道政策を持っており、かなり厄介です。それが明治になると中央集権国家になり、独自性は認めないとなります。例えば、参勤交代や宿駅制がなくなり、本街道と脇街道の区別がなくなります。

また江戸時代の物資輸送は、陸路は一般に人間の利用が中心で、大量の輸送の場合は川の船を利用したので、川船の大きさに決まりがありました。

江戸時代の最上川舟運は盛んなことで有名でしたが、本流は酒田から左沢（大江町）まで、川船はヒラタ船（米250俵積）と決められていました。左沢から上流は松川と呼ばれて置賜地方の中心を流れ、川船は小型の小鵜飼船（米50俵余積）が走っていました。この大小船が明治になると、上下流とも自由になるのです。

- 3) 明治前期の街道政策：三島県令は、国の東北開発政策の一環もあるが、明治国家のめざす富国強兵のため、荷車・馬車輸送ができる街道にするため改修に力を入れました。

三島県令任期の明治9～15年までに、18道路、22区分の街道改修【図2】が完成しました。外に離任後完成した小国新道があります。

費用の負担は、県費・国費（トンネル4箇所）・協議費（村・町・



があります。由一は当時日本一流で油絵の先駆者です。

3県の計128点、うち山形県52点です。小国新道は、一番多く6点で、宇津峠4点【図3】、現小国町の沼澤村2点です。



【図3】宇津峠の由一画<山形大学付属図書館蔵>

昭和から現代までの国道113号整備の経緯について

パネリスト 廣瀬健二郎氏

1) 明治維新後の道路整備：明治政府は、殖産振興より富国強兵のため、1築港、2鉄道、3炭坑で、道路は出てきません。その背景には、ヨーロッパと違い日本は馬車文化がなかったため、道路を整備しても効率的な車両製造能力・整備能力がなかったことがあります。

鉄道と高速道路の整備の変遷を見ると、明治38年の奥羽本線全通頃から順調に進み、昭和20年には現延長19kmとなります。

一方、高速道路は昭和38年に名神高速が一部開通してから、現在約1万km位と大幅に遅れました。

2) 昭和初期：第1次世界大戦後の世界的な恐慌や大正末期の関東大震災もあり、失業対策で道路事業が進んできた時代です。

また、自動車を通す道路が出来始めたのがこの時期です。

3) 戦後：モータリゼーションの進展で、車に対応する道路の改良（一次改築という）が進みます。その後、平成にかけては、現道を迂回（バイパス）出来る様な道路にすることが始まったという流れになります。

4) 羽越水害：国道113号は、昭和28年に国道指定され、県による改良が進みますが、抜本的には至っていませんでした。

整備が画期的に進んだのは、昭和42年羽越水害以降です。水害で甚大な被害を受け【図4】、当時の建設省が、この113号の復旧を取組むことになりました。昭和44年に本復旧が完成し、併せて一次改築を進め昭和52年に完成しました。途中エピソードがあります。開通前の昭和48年12月に小国町が大雪で孤立します。その時は米坂線だけで近づけなかつた。そこで当時の北陸地方建設局が、開通前の道路に小国町までタンクローリーを通しました。当時の新聞に“灯油が来るぞ小国町”的記事があり、3日間だけですが、災害支援の形が残っています。



【図4】羽越灾害で被災の小国橋

5) その後：現道は整備しましたが、道路混雑や非常に線形の悪いところなどは、バイパス事業（二次改築という）を行います。添川バイパスや新宇津トンネル（落合改良）の様な整備を進めてきました。

最近の赤湯バイパスは、南陽の市街地を迂回する自動車専用道路ですが、新潟山形南部連絡道路の一部区間として初の開通ということになります。

郡の負担で民費とも呼ぶ)と寄付金(富裕上層者)からなっていました。

4) 高橋由一の石版：三島が栃木県令を離任後に描かせた3県の『道路改修記念画帖』(明治18年刊行)

それぞれの道がこれまで果たしてきた役割・効果について

○宮原 これまで、十三峠の歴史的事実を話して頂きましたが、この道がどの様な役割を果たし、効果を生んで来たのかについてお願いいたします。

○原 江戸時代の越後街道の特色ですが、1つの例は塩だと思います。明和9年(1722)に米沢藩内で塩がなくなります。この時、渡邊家に頼り、竹原(広島県)や新潟で塩を買い取り、都合6,500俵位を購入して、これを越後街道で運びます。最上川利用だと長井から酒田まで往復50日位で、費用も大変かかります。街道の陸送も安くないですが、緊急時などの場合、唯一繋がっている街道は自らがある程度自由にできます。そうした意味で重要な街道だったと思っています。

○横山 1) 明治15年の山形県の15街道全体と越後街道だけの移出入量が【図5】です。街道改修は完了の頃です。ただし、荷

明治15年 山形県内15街道全体と (越後街道)の比重要	
・全県移出量	8,287駄 (1,720駄 青苧 生糸 煙草)
・全県移入量	15,611駄 (8,400駄 鮭 塩 太物 古着)

【図5】街道の移出入量

車がどの位通っているかを由一画で見ると、人や人力車をリアルに描いており面白ですが、荷車を描いた絵はない。少なかつたので描かなかったかもしれません。しかし、それを目的に街道整備をしたにも関わらず、沢山の絵の中に荷車がないのが不思議です。明治になり規制がなくなつて、街道も出来たが、実態として輸送手段や輸送量はそんなに大きく変わらないのかというところが、重要なポイントだと思います。

2) 新潟の方に出す主な荷物は、青苧、生糸、煙草という米沢の特産物が主要を占めているが、県全体の半分を占めていないところが、移入量は、全県15街道に対して、越後街道は半分以上です。これは、それまでこの様な統計がないため分からなかつたからです。一方、置賜以外は、最上川舟運があり、これが全てではない。また全県移出量もそんなに多くなつてないと考えるべきだと思います。

3) 大事なことは、明治に入つても背負子、牛馬の背です。荷車は明治10年頃からで、20年頃から急速に多くなつてきます。馬車は明治25年頃からです。また越後街道は、改修が遅かったという事情もあります。明治11年にイザベラ・バードが来た頃は、まだ改修の最中か完成直後で、峠のトンネルや川の橋がないと荷物の積み降ろしが必要で、荷車が通る意味がありません。

○廣瀬 モノや人の交流という道路の役割や効果は、時代が変わって同じかなと感じています。今日は、現代な視点から国道113号の効果を4つほど紹介します。

1) 医療施設への速達性：赤湯バイパスの例です。新しい道路が出来て、より速く通行出来ることから、置賜総合病院への救急搬送が非常に増えています。特に、高畠町からが増えています。いつの時代でも急病人が出た場合に、一刻も早く病院へ運ぶことは重要なことです。今、南部連絡道路に求められている役割の1つだと思います。

2) 観光：赤湯温泉は、赤湯バイパスが出来て、観光客が増加しています。理由は、今まで市街地の道路を通過する大型車が走っており、市街地を整備することが出来なかつた。バイパスが出来て、赤湯を通過するトラック等がバイパスを通ります。これに併せて南陽市は、人が歩いて楽しめる街づくりをしてきました。結果として、観光客が非常に増えているという例です。

3) 雇用の関係：道路のIC付近など交通の便が良いところは、輸送面の優位性があるので、道路整備に併せて工業団地が造られま



【図6】東日本大震災後の物資輸送経路

す。赤湯バイパスでも企業立地が進み雇用も生まれています。

4) 東日本大震災時：西日本など新潟方面からの物資は、国道113号を通り、宮城県へ運ばれました【図6】。もし113号がなければ非常に遠回りになり、迅速に運ぶことが困難でした。113号が支援に大きな役割を果たしました。

今後の更なる交流に向けた方策について

○宮原 最後になります。今後の新潟山形南部間の交流における具体的な提案について、意見をお願いします。

○廣瀬 1) 地域の課題：ここは豪雪地帯で、小国町の累加降雪量は10mと非常に多い。先ほど工事中の道路で石油を運んだ話をしましたが、雪で閉ざされる恐れがあります。今の113号は、昔に比べると安全な道路になっていますが、まだ雪の障害は残っていると思います。一度雪で止まると、新潟から山形までは、会津経由の広域な迂回になります【図7】。そのためより安全な道路を造っていく必要があると考えています。



小国町の救急搬送の4割が置賜総合病院です。雪道運転は非常に怖いとドライバーから聞きます。雪が積もってくると車の通れるスペースが減って来ます。一刻を争う救急搬送には、非常に大きな課題となります。

2)「新潟山形南部連絡道路」：現在、村上市から高畠町(L=約80km)までを羽越河川国道事務所と山形河川国道事務所で事業を進めています。先ほどの赤湯バイパス以外にも新潟県の荒川道路が既に開通しており、赤湯バイパスに続く梨郷道路、関川村の鷹ノ巣道路が事業中です。そして、関川小国間が次の事業化に向けて調査を行っています。梨郷道路は、用地進捗率約9割の協力を頂き、事業として約3割の進捗状況です。

3) この道路が完成した場合の効果：小国町のセラミック部材の大手企業は、既にアジアの拠点企業です。原材料は海外から新潟港へ、小国町の工場で製品を造り、成田空港から海外へ輸出します。陸送を担う道路はまさに物流の大きなネットワークになっています。

もう一つ。上山市に薬品会社があります。東北中央自動車道や新潟山形南部連絡道路が出来てくると、関西方面にも輸送出来ることから大きな工場を増設する話が出ています。

この様に、道路は、地域を大きく変えていく起爆剤にもなり、産業だけでなく、観光の面からも非常に重要な役割を担っていると思います。

○原 1) 我々歴史研究者は、新潟や宮城の研究者と仲が良く、飲み友です。理由は、新潟県内で中世や近世前期の展示をする場合、米沢に借りないと成り立ちません。米沢でも上杉家から地域に出た資料があるので、貸し借りする必要があります。伊達家とも同じです。以外にも学問の世界では、大学教員や学芸員などが、非常に仲が良く交流が盛んです。

2) 私は、小国高校の地域文化授業で学生と13峰のうち8峰くらい歩きました。感じたのは、黒沢峠だけでなく、萱野峠などもきれいにすれば、黒沢峠と同様の史跡的価値がある場所ではないか、他にも同様な峠があるのではないかと思っていました。

一方、朴ノ木峠の出口で迷いました。入口と峠の山頂は分かれましたが、その途中の道案内などに課題があると思います。そうすると、我々の研究者同士で、黒沢峠や13峠をテーマにした学会も開いたりして、周知出来ると思うので、是非色々な形

で協力したいと思っています。

○横山 1) 米沢盆地の桃源郷：平成5年に第1回「日本の美しい村コンテスト」で農水大臣賞受賞の景観【図8】で、文化面の発信が出来ることは言うまでもありません。しかし、この散居集落は、農村の社会的な研究史からいうと、戦国時代の伊達氏の在来に由来するというのが一般的です。

この在方（農村）の文化は、そのままの姿を残していないが、原形を留めているところをどう見るかが大切です。そして、散居集落の伝統の教育や地域をどうすれば良いか考えていく必要があります。

2) 小国町の地域づくり：平成26年第二次産業就業人口は、約43%で、全県的に見ても40%超えているところはありません。これは昭和11年米坂線開通の翌年進出の半導体部材関連企業の就業が中心だと思います。

一方、小国町には、集落数が約40と多い。これは自然が多いということです。自然を生かした取り組みと第二次産業とをどう調和させ発展していくか。小国町はある意味でモデルです。これからの地域づくりは小国を参考にしていくべきで、道路交通と大いに関わってくると思います。

まとめ

○宮原 今日のディスカッションをまとめます。

これからの日本が抱える大きな問題は、高齢化と少子化社会です。この中で、地域の経済活動が厳しくなっていくことから、地域間連携が大きな課題になって来ます。道路が地域や人の連携は繋いでくれることになります。しかし、その時に現代から先だけを見るのではなく、歴史を捉えることは、地域の誇りを確認する上で大変重要なことだと思います。歴史文化とは、ある意味地域を担うもので、羅針盤としての機能も持っているのではと思います。

関川村の渡邊邸が平成の大修理で甦った時に、地域ではそれを宝のように扱い、その空間を通じた色々な文化的な活動がどんどん伸びていています。

この様に地域の宝を知ることや原先生からの渡邊家の塩の話などの歴史的事実を捉えていくとは、そこにあった地域のエネルギーを知ることにも繋がります。そのエネルギーをどうしたら今に活かせるのかと変換する。その時の変換する力を確認することも地域の誇りといえると思います。そして、その誇りを子供たちにも伝え、地域の元気や人づくりなどに活かし、街づくりのアイデアに反映させていくことが大事だらうと思います。

それから、横山先生からの散居集落の話などの歴史的背景をもった素晴らしい地域の資産・ふるさとの誇りを表や写真に情報整理して、今は、多様な手段で、いつでも、一瞬に発信することが出来ます。そして、それに対して意見を求めたら、世界中から共鳴、共感する人たちの反応が沢山来ます。それは、そんなに大変でもないことです。情報を伝えることが生活の一部として、もっと自然になっていったら良いと思います。

これからは、色々な事柄の歴史をつかみ、将来に向けて発信するということを念頭に、色々な地域が元気になることに反映させて頂きたいと思います。

※図は、分科会配付資料より抜粋



【図8】 散居集落の景観 <じゃらんnet> より

●第2分科会 「歴史の道・十三峠の保全と活用」

十三峠関係団体の活動紹介とともに、保全などの課題、及び今後の連携した活用方策について、話し合って頂きました。

＜パネルディスカッション＞



○鎧啓記氏 私は、6年前まで出版社の編集長をしており、色々な本を何百冊と作ってきましたが、特に街道に力を入れてたくさん作りながら街道に惚れ込んできました。そんな中で、街道関係の各地の方々にお会いする機会がありました。13・4年前、黒沢峠の前会長の保科充さんにお会いした時、イザベラ・バードのことや黒沢峠の話が非常に印象的でした。翌年、黒沢峠の敷石を歩き、東北にこんな歴史的遺産があったのかと驚きました。それから幾度となく通うなかで、十三峠の奥深さと魅力にどっぷり浸ったことが印象に残っています。

今日は、そこを歩いて苦労したイザベラ・バードの思いなどを受けて、これから十三峠がどのように保全され、どのような形で皆さんと関わっていけばよいのか、という様なことを一緒に探していくべきだという思いで、進めさせていただきます。

最初に、取り組みなどの団体紹介を、新潟の関川村から米沢への順でお願いします。

団体の活動紹介

○米野紀男氏 置賜と下越地方では、昭和42年の羽越水害で、壊滅的な被害を受けました。関川村では、この羽越水害の犠牲者の供養と村の大蛇伝説（大水に由来）を基にして、竹と藁で作った長さ112.8m、重さ2t、担ぎ手が500人の「大したもん蛇まつり」を開催し、今年で29回目になります【図1】。



【図1】大したもん蛇まつり

米沢街道地域づくり検討会の目的は、越後米沢街道の歴史と文化遺産を活かした活動、それと街道沿いの環境整備ということでスタートしました。そのきっかけは「撞木造りの街並みと米沢街道」の内容を基に保存活用を具体化しようとして始めました。現実には、平成21年の住民ワークショップで提案された内容を目的にこだわらずやれることを楽しくやろうということになりました。

関川村の中心地区にある渡邊邸の他、佐藤邸【図2】、津野邸などの古い建物は、ほとんどが撞木造りです。撞木（しゆもく）とは、鐘や半鐘などを叩くT字型の棒です。こうしたT字型の屋根家屋が並んでおり、調和がとれて落ち着きがあるとお褒めの言葉をいただいています。



【図2】佐藤邸

この様なことから役場周辺の街並みの一体化を基本に、鷹巣峠の入り口近くの河川公園「トンボ池」の環境整備を大枠としています。

具体的には、米沢街道の民家、渡邊邸のガイドブックの発行、観光客へのおもてなしも込めて道路の美化清掃を十数名で行っています。また、上杉鷹山と渡邊三左衛門との関わりを学ぶため、

先月に小学5・6年生と村民向けの二部構成の「米沢街道研修会」を渡邊邸で開催しました。

○岡村俊春氏 黒沢峠敷石道の保存活動について紹介します。

私は平成23年、ここ掘れ和ん話ん探検隊が山形県からの委託事業として、十三峠や周辺町村の観光資源を調査する中で、街道の魅力の深みにはまりました。

活動の原点は、昭和55年に黒沢地区民が黒沢峠敷石道保存会を結成して、ボランティアの力も借り、5年の歳月をかけて復元に努めたことです【図3】。

保存活動は、春の合同作業から始まります。雪の深い所ですから、倒木の撤去や藪の刈り払い、落葉が堆積し敷石が見えなくなっているのでその除去作業です。峠道を楽しく歩いてもらうために欠かせない作業となります。



【図3】敷石掘起き作業

次に、黒沢峠まつりです。これは毎年10月の最終日曜日に実施しています。30回目の今年は、120名を超える参加者で大変盛況のうちに終えました。祭りのメインはトレッキングですが、蓑、笠、草鞋履きの昔にタイムスリップしたような姿でガイド【図4】し、



【図4】黒沢峠まつり

峠の説明とクイズを行いながら、楽しく2.6kmを歩きます。最後にお祭り広場に到着し、バーベキューやお餅、お酒も飲みながら交流をします。盛り上がった気持ちを丸太切り競争、カラオケなどで発散し、にぎやかな交流会となります。

そして、保全活動があります。黒沢峠は復元してから35年以上たっており、その間に雨や雪解け水などによる土砂の流失があります。また、年間2千人以上の方が訪れます。敷石の上がり歩きにくいということで両サイドを歩くため、その度に土が掘れて敷石が浮き上がるということが生じてきました。小国町指定の文化財でもあり、後世に残すためにも保全活動が必要となり、昨年はやまがた社会貢献基金、



今年は小国町教育委員会の支援をいただき、町内の中高生を含めたボランティアを募り、昨年は174名の参加で保全活動を行っています【図5】。両サイドの掘れているところに麻袋の土嚢をダム式に敷き、土砂の流失をくい止める方法で行っています。

これまでの活動が評価され、今年の「地域づくりのやまがた景観賞」の知事賞を今月24日に頂くことになりました。

○鎧 黒沢峠の前会長に最初会った時、イザベラ・バードは好きじゃないと言っていました。その後に会った時は、「本なんかも読んで、ちょっと気持ち変わって来て、今は好きだ。あの時、悪口を書いていたけれど、良く読むとその当時の日本の姿だった。今思うと、140年前の黒沢のことを記録に残してくれたことがありがたい。お陰で敷石保存もやるこ



【図6】宇津峠頂上の碑



【図8】玉石積擁壁



【図7】宇津明神



【図9】S42年までの国道113号

とになったし、峠の活動も盛んになるきっかけにもなった。バードに感謝だ」と言っていましたので、紹介します。

○高橋純氏 宇津峠頂上にある【図6】の中央左の石碑は、幕末頃に十三峠全域の道普請を行った際の供養塔です。宇津峠のみならず十三峠のシンボルとなっています。【図7】の社は宇津明神といい、昭和37年まで峠頂上に神社として祀られておりました。

【図8】は玉石積擁壁です。このような玉石積擁壁は宇津峠の東側だけで3カ所あります。2カ所は切土力所、盛土力所は幅が30m、高さ7mで、うち3mが地中に埋設されています。この三島新道は明治17年に出来ていますが、その道が数年で崩れたりして使えなくなり、その代替としてほとんど旧道に沿うような形で作られています。

【図9】が昭和42年まで国道113号として使われてきた旧国道です。

【図10】は、バードが「東洋のアルガディア」と発したであろうと推測される景観の場所です。この奥に南陽や長井の東側の平野地、そして高畠などの米沢盆地の一帯が広がっています。



【図10】宇津峠眺望

活動ですが、宇津峠は歩こう会を春と秋の年2回継続して実施しています。登り口の落合地蔵尊に安全祈願をして、途中のガイドの説明に耳を傾けながら頂上を目指します。最後は公民館に戻り、芋煮や餅のふるまいで疲れを癒します。

色々な方が訪れます、去年4月には作家の浅田次郎さんがまだ雪のある時にきました。浅田さんの小説「壬生義士伝」下巻に「宇津峠を雪をこいで越えた」という一節があり、そういう縁です。また遺構調査の関係などで最近はよく新聞に記事が掲載されます。

古道を守る活動ですが、草刈りや5月に案内板を10ヶ所に設置。手ノ子小学生に「山形の宝」の説明や、野鳥の保護活動の一環として米沢から講師を招き観察会を開催しました。また、案内人講座の開催や、「宇津峠の草花」「宇津峠の史跡」などの冊子や絵葉書も作成し、販売もしています。

この様な活動が評価され、今年1月に「未来に伝える山形の宝」に登録されました。

ところで、イザベラ・バードが、手ノ子で伊藤が食べた「皿にもつたぞつとするようなもの」は、納豆餅ではないかといわれます。我々は、バードの通った7月と9月に、納豆が食用になるか実験しました。大変粘りが出るが、臭が激しくて、食に耐えられるものじゃなかった。また、餅はお祝時につくものです。この日、伊藤の膳に餅が付いたとしても、主客のバードに



【図11】諏訪峠

餅がないというのはちょっと合点がいかない。ということで、餅は出していないし、ましてや納豆餅は食べていない。というのが私達の結論です。

○片倉尚氏 バードが通ったであろう諏訪峠の古道は、その後に何段階もの道路改修があり、残っているのは数百m程度と非常に短区間です【図11】。

平成19年に小松地区に地域振興協議会諏訪部会が設立され、その部会と地元の愛好家が一緒になって、街道保存というより、ちょっと草を刈ってみようかという興味の対象として始まったのが実態です。

私個人は、30年ほど前から日本奥地紀行を見て色々調べており、戦後まもなく茶屋があったと古老から聞いているし、昔の地図にも載っています。この茶屋跡の土地や旧道を研究してみたいと思ったのが始まりです。

活動はまだ初期の段階ですが、これから研究を進めていく中で宝の山が見えてくるかもしれません。バードは謎の人物です。米沢へは行かずわざわざ未開の所を通ろうとしておりますから、なぜ諏訪峠を通ったのかを皆さんと一緒に散策しながら考えてみたいと思います。

峠付近には、バードがその地点に立ったかわかりませんが、バードが記載した「南に繁栄している米沢、左に赤湯がある」がそのまま見える場所があります【図12】。



【図12】諏訪峠付近眺望

草刈りは、年2回

実施していましたが、当時は苦労して草刈りをやってきました。それでは繋がっていないので途中から置賜農業高校の生徒さんたちの学習の場として、いろんな整備に参加していただいています。活動は、このような状況で置賜農業高校生の応援を得ないと回らないという状況です。

今後の十三峠への関わり、課題と展望

○鎧 これからは、今後どのように十三峠に関わっていくのか、課題は何か、展望への期待、バードとの関わりなどについてお話しitたいと思います。

○米野 村中心地区の米沢街道で活動しており、十三峠の活動はほとんどないという実態で、来年から十三峠交流会の会員に加入したいということと、十三峠に関わる資源を掘り起こし、ガイドブック第3号につないでいくことです。

また、案内標識が恥ずかしいような状態ですので、村とか県の協力を得ながら整備したいと思います。

皆さんの仲間に加えさせていただいて、活動を参考に研究し掘り起こしながら、一歩一步進んで行きたいと思っております。○岡村 黒沢峠の今後の活動についての第1番目は、春の共同作業、月ごとの班作業、秋の黒沢峠祭りは当然継続していかなければなりません。

2番目は保全活動です。このままだと文化財としての価値を損なう恐れがありますので継続していきます。

もう一つ、敷石を石工職人が切り出したタガネの跡が残る石があります。これは文化財として価値の高いものと思います。場所はわかつておるので、調査を含めて進めていかなければなりません。

「未来に伝える山形の宝」に応募しましたので、登録された

ら支援を得て活動したいと思います。

十三峠全体としての交流促進ですが、単体での動きは多くあります、交流する中で情報の共有化を図り、交流事業を活発化しなければいけないと考えています。(※平成28年12月20日「未来に伝える山形の宝」に登録された。:事務局記)

○高橋 宇津峠の文化資源の価値を高めるということで、宇津明神と介(たすけ)茶屋の遺構調査を実施しています。介茶屋は、文献に11間×4.5間の建物があったと記されています。場所はこの辺だとうというところまで来ていますが確定出来ていません。

宇津明神は、昭和37年にふもとに遷座して、石碑だけ残っていますが、撤去前のものと思われる古い柱が見つかっていますので、来年以降の調査にしたいと思います。

道に関して、バードが歩いた近世の道とその後に造られた車の道が残っていますが、トレンチを切って調査したところバードの道は一切人の手がかけられず、ただ踏み固められた感じでした。明治の道は盛土などの痕跡がはっきり断面で分かりました。

今年は「山形の宝」の資金を活用し調査しています。しかし、この様な地道な仕事に協力してくれる人が少ないと、安定した財源の確保について研究していくことが課題です。

○片倉 保存活動は単体では活動はなかなか難しいし、その力はないと思います。会員も高齢化してきており、いつまで続けられるか分からぬ現状です。やはり関連したイベントを考えなければいけないので、高校生の手を借りるのも大事です。彼らの学習の場というだけでなく、もう少し興味の湧くような内容を掘り起さなければと思っております。

また、なぜバードがわざわざ小松に来たのか、奥地紀行などに繁栄した町に来たのかが謎です。あすの探訪会Dコースで「鴨川」という料理屋で昼食を食べますが、昔そこは芸者衆が住み込んでいたところです。ダリア園の裏山にスキー場があります。山形県のヒュッテがあった頃、駅から30分もしないで滑れるスキー場は他になかったということで賑わいました。当時は、ナイター設備はありませんから、アフタースキーは「鴨川」で芸者を挙げて賑やかに楽しんだとのことです。

小松はそれだけ繁栄した宿場町で、バードも興味を持って峠を越えてきたのではと我々は思っております。峠の散策だけだとあつという間に終わってしまうので、街中散策を今後も続けて行きたいと思っており、興味のある方を誘っているところです。

○鎧 文化財としての視点での保存や調査活動、財源や人材の確保の悩み、単体ではなく連携した活動の必要性などの課題を抱えながらも、まだまだ掘り起せる魅力を持っていることが分かりました。

今日のテーマが十三峠の保全と活用ですが、会場に土木遺産に関わっている東北大大学の後藤先生がいますので、アドバイスをいただきたいと思います。

○後藤光亀氏 土木学会で選奨土木遺産という認定制度があり、十三峠も認定候補になっていますが、いくつか課題があります。一つは管理者の確認でこれがなかなか厄介です。もう一つは、道をつくる場合に昔の人は、山を切り、土を固めて石を置いて、山から水の排水処理など色々な工夫をしてるはずです。そういう痕跡が見えてくると技術的に素晴らしいということになると思います。道路の変遷も含めていろいろ調査をして、土木技術が素晴らしいという付加価値がつけば、学会でも選奨土木遺産に認定させていただきたいと思っていますので、ぜひご検討いただきたいと思います。

○鎧 土木遺産観光ということで、東北でもだんだん増えてき

ります。私も奥州街道の盛岡以北の一里塚調査を後藤先生や街道会議メンバーと一緒にやり、全国で初めて街道が認定されました。十三峠も、後藤先生のアドバイスを受け作業をしていけば面白いと思います。

5年ほど前、米沢在住の伊藤さんにバードの紀行本を書いていただきました。バードについてこれ以上調べている人はいないと言って良い人です。良いアドバイスや謎解きの手伝いをしていただけると思います。そういう助っ人も周りにおりますので、いろんな形で外の人を引っ張り込めば、十三峠の新しい顔が見えてくると思いました。

会場からの意見

奥山氏(天童) 保存・保全という状況はそれぞれの方々が懸命になされていることが分かりました。6年前の六十里越街道大会の後、私は東海道や中山道を歩いてきました。

さて、そういう中で、先ほど財源の問題がありました。今この国は高齢化という課題があります。経済産業省に健康というテーマでヘルスケアツーリズムやフットパスというような地域おこしにもつながるような財源確保の道があります。

6年前の六十里越街道大会の時にネットワークを作つて課題解決に向かうべきと思いましたが、今日も課題がピックアップされるだけで、継続的にフォローアップがされていないことを感じました。これはあえて言うとオタクになってしまっており、もう少し課題をオープンにしたかたちで東北六県復興のキーワードにしていくためのネットワークを作る必要があります。

バードが歩いたことも大事ですが、一般の人がどういう風に歩いてくれるかだと思います。越後から出羽の方に来る道は、歴史的な価値があり、カルチャーという観点からも期待しておりますので、一步駒を進めてみてはいかがでしょうか。

○鎧 非常に重要なご指摘だと思います。オタクというお話がありましたら、そういう面が多々あると思います。

東海道とか中山道は多くの人が歩いています。奥州街道や十三峠は決して多くありませんが、十三峠は特に峠歩きの出来るところですから、全体として魅力と価値があると私は気づいております。

課題は、峠を越えてから車にどう戻るかや宿にどうやって行くかという足のなさです。そこを解決できれば温泉が好きな方とか、峠歩きが好きな方とかが、自由に溶け込めるような仕組みが作れると感じています。実は「ここ掘れ和ん話ん探検隊」と話したことがあります、実際は簡単なことではなくて、まだやれないでいます。私もお手伝いをしてやっていこう思います。

山形では六十里越街道がその辺はうまく進んでおり、十三峠も負けない魅力を持っておりますから、ぜひ一緒にやりたいと思います。

今日、私の進行が至らないことで、話し足りないところがあつたかと思いますことをお詫び致します。

今後もいろんな形で皆さんのお手伝いをしていきたいと思いますので、是非お声がけいただければと思います。
これで終了させていただきます。有り難うございました。

※図の写真等は、プレゼンテーション画像から抜粋及び事務局の写真

街道探訪会

A：越後豪農と鷹巣峠探訪コース（関川村）徒步距離約2km

■コース 9:45～11:15 国指定重要文化財「渡邊邸」⇒11:30～12:15 東桂苑（昼食）⇒12:30～13:30 鷹の巣峠散策⇒13:45 関川村役場駐車場

■みどころ 渡邊邸は越後米沢街道の要衝に屋敷を構える豪商・豪農の館で、街道の恩恵を受ける一方で、峠道に自費を投じて再整備するなど深い結びつきがあります。鷹巣峠は十三峠の越後側の玄関口で、往時を偲ばせる峠道がひっそりと皆様をお待ちしています。昼食は、地元のかあちゃんの郷土料理を用意しました。



B：黒沢峠・苔むした敷石道探訪コース（小国町）徒步距離約3km

■コース 9:15 森のめぐみ直売所駐車場⇒9:45 黒沢峠入口（市野々側）⇒10:00～12:30 黒沢峠敷石道散策⇒12:30～13:30 黒沢地区公民館（昼食）⇒14:00 森のめぐみ直売所（きのこ直売）駐車場

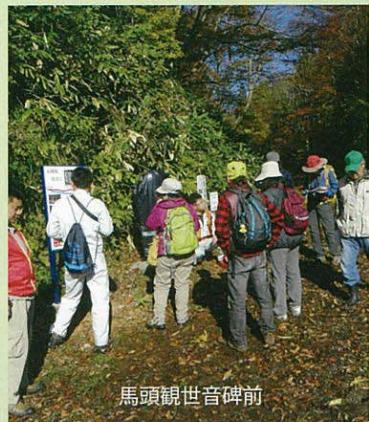
■みどころ 黒沢峠は約1.7kmにわたって3,600段の敷石が敷かれ、その苔むした様は、当時の賑やかな往来や物流を静かに物語っています。また、敷石保全活動についても説明。昼食は、地域に伝わる山菜料理や郷土料理をいただきました。



C:光あふれる宇津峠と人々との機微に満ちた手ノ子宿コース（飯豊町）徒步距離約5km

■コース 8:30 まどか⇒8:50 小国町沼沢＝宇津峠散策＝飯豊町手ノ子地蔵堂前⇒手ノ子駅遁跡⇒12:15～13:30 西部地区公民館（昼食）⇒14:30 まどか

■みどころ 十三峠の中でも最も史跡の残る宇津峠、今実施中の石積みの発掘調査現場や馬頭観世音碑の補修状況も見学。昼食は、イザベラ・バードが「日本奥地紀行」に記した「驚きの食事」も楽しんでいただきました。



馬頭観世音碑前



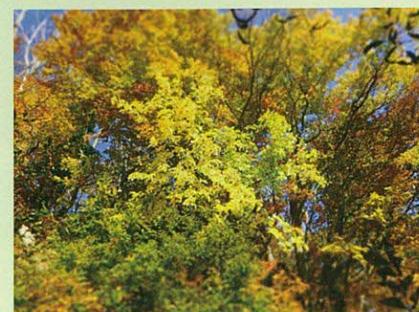
はだか杉



置賜盆地眺望



置賜盆地眺望



昼食（バードの記した驚きの食事再現）
2016.11.1



D：諏訪峠から望むアルカディア置賜盆地と

高梨健吉・井上ひさしのふるさと小松探訪コース（川西町）徒步距離約6km

■コース 9:00 まどか⇒9:15 諏訪峠下＝諏訪峠（置賜盆地遠望）＝諏訪峠下＝諏訪神社＝諏訪橋＝嵐山酒造＝ニシエイジュ石油（バード宿泊地）＝11:30～12:30 割烹鴨川（昼食）＝井上ひさしが遊んだ町並み＝13:15～14:30 樽平酒造⇒15:00 羽前小松駅

■みどころ 諏訪峠から置賜盆地の散居集落を眺めました。バードが宿泊した小松は、交通の要衝として発達した宿場町で、『日本奥地紀行』の訳者高梨健吉や国民的作家井上ひさしのふるさと。歴史ある割烹料理屋での昼食のあと、街並みを楽しみながら井上ゆかりの老舗酒蔵を訪ねました。



↑バード宿泊地跡

←高梨健吉の生家

樽平酒造の酒蔵↓



料亭 鴨川（昼食）



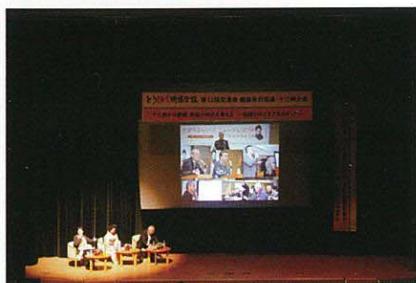
会場の様子



オープニングセレモニー



基調鼎談



第一分科会



第二分科会



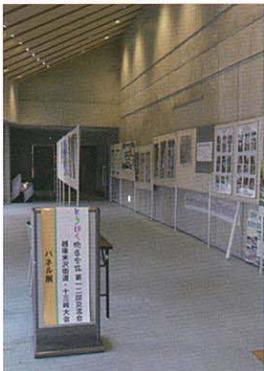
<オープニング> 越後瞽女唄 萱森 直子氏



(かやもり なおこ)

「瞽女唄（ごぜうた）」とは、盲目の女性が生きるために三味線をたずさえ村々を回っていた旅芸人（瞽女）が唄った唄です。この伝統が途絶えず引き継がれたのは越後だけです。山形は瞽女をあたたかく遇する土地だったため、この越後米沢街道・十三峠にも多くの瞽女さんが足跡を残しました。萱森氏は、「最後の長岡瞽女」といわれた小林ハルさんに師事するなど、長岡・高田両系統を直接伝授された唯一の伝承者です。

●活動紹介パネル展



●交流会 第二部 「街道談義」



持ち寄った各地の地酒